

都市型知識人社会の形態 — 清代中期の蘇州・揚州・南京を中心に —

王 標

要 旨

本稿では、清代中期における都市型知識人社会の形態を解明する一つの手がかりとして、最も都市化の進んだ清代江南地域の蘇州・揚州・南京という三つの中心都市を舞台にして、当時の知識人が「文学場」と「学術場」という二つの主な知的空間で文化資本及び権力言説をめぐって演じた継承と革新、模倣と創造、等の文化的パフォーマンスを詳細に分析することにより、清代中期の「義理」(philosophy)・「考拠」(philology)・「詞章」(literary art)という三つの「知」の類型と都市との関わりを明らかにする。

また、知識の生産・流通を担う文化装置として、三つの都市に置かれた書院・幕府などの学習空間と職域空間、遊里・園林などの悦楽空間を全体的に把握し、特に書院・幕府などの職域空間と都市型知識人の職業化との関係を明らかにする。

最後に、知識人の都市と都市の間での社会的移動と地理的移動の有り様や都市内部の文化装置の性格を解明するために、都市型知識人の社会構造のモデルを提出している。三つの都市はそれぞれが政治・経済・文化に異なる重点を置いていたことによって、都市の生態構造、文化的装置や文化的特徴などに微妙な差異が生まれた。知識人はそれぞれ都市の異なる性格に応じて、みずからの移動策略(mobility strategy)によって、多種多様なチャンスを求めようとして中心都市に蟄集し、経済資本・文化資本・社会関係資本を有効的に利用して、流動的危機的な競争社会状況の中で知識人「共同体」を形成したことを明らかにしている。

キーワード：清代中期、江南、中心都市、知識人、社会構造

I 問題の提起

ベンジャミン・A. エルマン氏の『経学、政治と宗族：中国王朝末期の常州今文学派』は、「思想史」と「社会史」を貫通した大作と評価されている。彼は18世紀における今文経学の再興を常州の莊・劉という二つの宗族の発展と結びつけて考察し、常州今文学派の勃興に作用した経学・宗族・政治の相互作用を具体的に検証した。彼は「宗族は揚子江下流地域の知識人が依存した社会と政治制度を解明する独特かつ有効な切り口である」と考えている¹⁾。

しかし、18世紀の揚子江下流地域では、本当に氏の描いたように、宗族を形成することが都市縉紳(知識人)集団の唯一の選択肢であったのだろうか。エルマンが提出した常州の宗族的文化資本の再生産モデル²⁾は、江南の他の都市にも応用できるのだろうか。江南の全体的な商業化・都市化の高度成長の内部にあって、常州は最も遅れていた地域であった。このように常州の後進性こそが、外部勢力を受けて地元文化資源や権力構造が分散・分化するのを有効に防ぐ機能を果たし、莊・劉両族を顕著な大宗族にしたと私は考えている。それ故に、江南の都市型

知識人集団が常にどのような組織構造を選んだかを結論する前に、まず蘇州・揚州・南京を事例として、18世紀の江南都市社会の特質及び知識人と宗族との関係を考察したい。

II 揚州・南京・蘇州都市社会の特質

明代の弘治（1488～1505）年間以後、運司納銀制度が確立されて、揚州は両淮塩業の「中心地」（central place）³⁾として、各地の塩商人がここに雲集し、都市は極めて発展した。特に揚子江と運河との交差点として、揚州は急速に江南と北京を連結する経済的中心地となった。塩業に従事して莫大な利潤を得た商人たちは、その商業所得の大部分を拡大再生産に用いるのではなく、かえって富を学問的・官僚的成功へ転換することを通じて、本人及び家族がさらに高い社会的地位を得ようとした。何秉棣氏の研究によると、清代の揚州府の進士総数は348名に達し、また11名の第一甲合格者を生んだ。さらに1646～1802の間に両淮塩商人集団だけで

139名の進士を生み、重要な文化先進地域の地位を確立した⁴⁾。これらの「紳商」（商人＋縉紳）の提唱と影響を受けて、揚州は高雅な文化的雰囲気有し、天下の文人でいささか詩を自負する者は、こぞって揚州に行って生計を立てようとした。当時「揚州はあたり一面詩人ばかり」（揚州満地都是詩人）という俗諺があったほどである。江南の文人が揚州に蟠集したので、揚州文化が江南文化のエッセンスとみなされた。それ故に、揚州は地理的位置から見れば揚子江以北にあり、「江南」地域に入っていないが、江南文化、特に江南都市型知識人の社会構造を検討する際には、揚州を江南文化圏の内において考える必要がある。

南京は清代の江蘇省の省都でもあり、同時に両江総督府の所在地でもあったので、江蘇省の行政的中心地である。南京の経済的地位について、モッテ(F. W. Mote)は次のように指摘している。南京及びその近隣地域は揚子江下流地域特有の豊かな資源——即ち稲作・蚕桑・漁業・鉱業・製塩等——に乏しかった。南京の経済的地位は如何なる特有の地方産業に基づくのではなく、広大なヒンターランドに対する政治的軍事的支配力に基づいている⁵⁾。しかし、明の成祖が北京へ遷都し、清代にはまた副都から降格されて省都となつてから、全国レベルの経済的中心都市としての地位も行政中心の地位の喪失に伴って過去のものとなった。南京は依然として木材や糧食の集散地でもあったが、しかしその木材はただ転売輸送のためであり、米穀もただ膨大な人口の需要を満足させるだけのものではあった。南京は都市周縁部に対する輻射機能も極めて弱く、全国レベルの経済的地位も中位であった。清代の南京はわずかに江南の区域中心市場であり、主な機能として江南と揚子江中上流及び皖（安徽）北、河南などの中原地域との経済連結の働きをしたのである⁶⁾。

明代の後半から南京に代わって全国中心市場となったのは蘇州である。乾隆期の孫嘉淦は蘇州の繁盛が北京より上であつて、「閭閻の内外には、荷物が山ほど積まれ、人波は河の流れのごとく、並んでいる店の看板は錦のように華やかである。その繁華さを語れば、都門〔北京〕も及ばない」と述べている⁷⁾。蘇州府城の西側

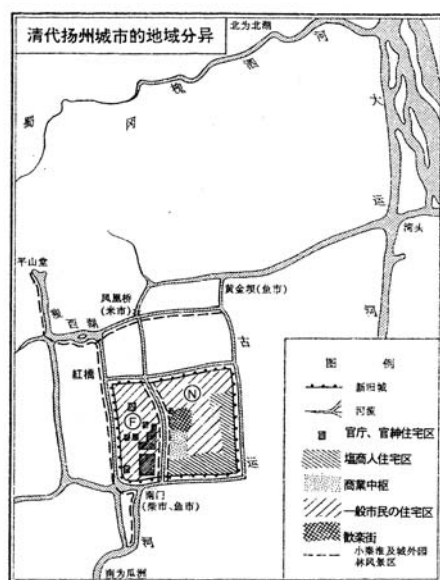


図1 揚州新旧城図

（出典：王振忠『明清徽商与淮揚社会変遷』，三聯書店，1996年）



図2 南京城内図

(出典：岩城秀夫訳『板橋雜記・蘇州画舫録』，平凡社，1964年)

の閶門北碼頭から胥門までの五六里の間には、人家が密集し、商人たちが往来していた。康熙年間の徐揚の描いた『盛世滋生図』が当時の経済活動の活況振りをあらわしている。19世紀のフランス人 Hedde はかつて蘇州の繁華を盛んに褒め称えて、「この都市は江南の絹織物と茶の都である。たんに美術とファッションの女王であるばかりではなく、最も活発な産業中心地でもあり、最も重要な商業中心地と貨物の集散地でもある」と言っている⁸⁾。蘇州の商業が非常に繁盛していたので、中国古典園林の代表としての蘇州園林の名声も賑やかな市場のかげに隠れ、「杭州は自然風光を以て勝り、蘇州は商店街を以て勝り、揚州は園林を以て勝っている」という諺まであったほどである⁹⁾。

三つの都市がそれぞれが政治・経済・文化に異なる重点を置いていたこと、及び地域中心地を形成した歴史の長さの違いによって、都市の生態構造にも差異があった¹⁰⁾。三つの都市の中で、揚州の都市生態構造は官紳区と商業区の二核並立の構造である。揚州の旧城(図1のF部)は元末明初の戦争中、朱元璋によって軍事拠点として建てられたが、運河から離れすぎているという経済的機能上の欠陥があったので、後に旧城の東側に運河沿いの新城(図1のN部)を

増築した。乾隆帝が南巡した時に、かつて地元の縉紳を招いて新・旧両城にどのような区別があるかを尋ねると、「新城には塩商人が住み、旧城には読書人が住んでいる」と答えた¹¹⁾。すな



図3 蘇州城内図

(出典：岩城秀夫訳『板橋雜記・蘇州画舫録』)

わち、一つは商業活動の中核である。もう一つは官紳文化の中核地域であり、縉紳たちの邸宅は常に彼らと密接な利害関係にある役所、特に学宮の近くに集中した。しかし、蘇州の場合は三核構造であった。蘇州城の北西に位置する閶門は商業活動の核として城外に極めて大きな商業区をかたちづくるようになった。閶門の城内には官僚や地主の住宅が密集しており、南西部には江蘇巡撫・蘇州府などの官庁関係と文廟・紫陽書院などの文教関係の施設が集中していた。官僚と地主の住宅地と官庁街との間には手工業を中心とした職人町があった。南京の秦淮は、明清時代の中国で最大規模をほこる色街である。図3で示した秦淮あたりの逆三角形地帯には、江南貢院・書店街（三山街）などの文教施設があり、また、江寧府・江寧県・江寧織造署・江蘇布政司などの官庁もその近くにあった。逆三角形の頂点である南の聚宝門のあたりは商業活動の中核である。官庁と文教施設と色街と商工区とがワンセット（一核構造）になっていたのである。

Ⅲ 血縁社会の空間的検討

中国のいずれの聚落階層構造にも地方の宗族組織が関係している。しかし、その数と力は均質ではない。宗族の分布は都市化レベルの高低に反比例する。血縁関係のつながりの緊密度は血縁集団の成員の空間的集中度によって決められるといえる。しかし、都市化レベルが比較的に高い社会構造の場合、宗族組織は発展の面と社会的意義の面で、農村の宗族より多くの制約を受けた。宗族の本来の目的は、家廟・族譜・義田などの一連の装置を設立し、血縁集団の空間的集中によって血縁集団成員間の社会的関係を均一化し、外部の異質なものととの交流をうまく排除することによって、危機的な状況の中で対外的闘争の勝利と対内的秩序の調整を得ようとするものである。しかし、都市生活のあり方から生ずる流動性によって、聚落に住むことができなくなった族人たちは宗族の地域的活動に参加することができない以上、彼らの血縁関係の緊密度が弱くなるのは当然なことと考え

られる。その上、族田から生ずる利益は常に共同生活地区にいる族人にしか分与されないように限定されていたので、都市生活の地理的流動性は必然的にある成員に不公平をもたらし、彼らは宗族資産投資に対する関心をなくしてしまう¹²⁾。呉滔氏の研究もこれを立証している。宜興・荊溪地域では、救済の対象は宗族の共同生活地区の内に住む同族成員に限定されており、共同生活地区に定住していない成員は救済範囲から排除されている。逆に同じ地区に住む宗族外の人たちがかえって救済の対象となる¹³⁾。

中国の社会結合原理として、もし宗族は危機的状況の中に意識的に形成される「共同体」だと言えるならば、都市にも危機的状況が存在しているけれども、ただ都市には危機的状況を脱する機能を持った装置がたくさんある。それは、宗族が影響力を持つ田舎より都市にチャンス（出世・享楽・利益獲得・知識の充足など）が多いことの一つである。

Ⅳ 都市化空間における知識人集団の編成

1) 「文学場」における揚州・蘇州・南京

清代江南の揚州・蘇州・南京は当時の経済中心地だけではなく、文化的中心地でもあった。文学を例にとると、三つの都市は清代における最も重要な三つの詩派——「神韻派」・「格調派」・「性霊派」と多く関わっている。清代の「格調」と「性霊」という二つの詩派はそれぞれ蘇州と南京から始まったと言える。揚州は「神韻派」の中心地であるとはいえないけれども、その代表人物たる王士禛（1634～1711）は揚州で勤めた五年間に頻繁な文学活動を行い、彼の周りに一群の優秀な詩人を集めた。その影響力は乾隆中期まで及び一つの詩人集団を形成した。王士禛が揚州で行った文化的パフォーマンスは後々までずっとこの都市に継承されて、絶え間なく再上演された。

王士禛は早年から詩名を博していた。順治十六年（1659年）に揚州推官となった彼は、康熙元年（1662年）六月十五日と康熙三年（1664年）三月九日、それぞれ江南の名士たちと「紅橋修禊」（紅橋で集まって詩を作る）を行った。王士

禎の紅橋での集いは、五年間の揚州在勤中に何回も行われたことは間違いない¹⁴⁾。ただなぜ1662年と1664年との紅橋での集いだけが記憶されたのだろう。トビエ (Tobie Meyer-Fong) は興味深い論文の中で次のように指摘している。清初の官辺筋の知識人と遺民集団との二つの共同体が自らの社会的ネットワークの正統性を探ろうとしている時に、美学と権威が一種独特に結合した「紅橋修禊」が気に入ったのだろう。この二回の集いを繰り返して追憶することによって、人びとがこの無名の「橋」の文化的象徴としての「意味」を喚起することが、参会者と追憶者との双方の期待した目的であった。王士禎はその「市隱」(＝都市型隠士)の官辺筋のパトロンの役割を演じることによって、その中から文化的威信を獲得した。追憶者は苦心して王士禎の声望を高めると同時に、王士禎の社会的ネットワークの成員であることによって、自分たちの声望をも高めた¹⁵⁾。これは明清時代に流行した雅集図の創作及び画賛詩を広く求めるやり方と非常に似通っている。共同体のメディア装置として、文人集団はよく絵画と画賛詩を通じて、「雅集」が伝達する「意味」と「メッセージ」——共有している言説——を絶えず喚起して、集団としての共同性を表現し再確認した¹⁶⁾。

清代中期に至って、コード化された「紅橋修禊」は揚州の中に、幾らかの変化を起こした。その懐旧的、またはセンチメンタリズム的な文学姿態はもう揚州の悦楽気分にならなくなっていったが、しかし、王士禎と同じく山東出身の同郷の兩淮塩運使盧見曾 (1690～1768) は懸命になって「一代正宗」としての王士禎との自己同一性を追い求め、自分のステータスを作り上げようとした。王士禎と同様に、彼も1757年の春に紅橋で詩人の集いを持ち、四首の七律を書いたが、後になって意外にも七千人余りの人がそれに唱和した。彼が編纂したこれらの詩は、300巻にもなった。盧見曾は王士禎を模倣した集いを通じて期待通りの名声を得た。当時この集いは、揚州における最も素晴らしい文化的パフォーマンスと考えられた。しかし、皮肉にも、唱和する人の数が多すぎたため、ネットワーク成員としての価値がやや低下したように思われて、名声を期待できなくなった唱和者は、逆に

唱和を断ることによって名声を得ようとした¹⁷⁾。

揚州東の新城に住んでいる塩商人たちは商業から巨額の富を獲得したが、西の旧城に住む縉紳たちは故意に商人たちの文化品格を貶めようとしたらしい。李斗が記録した王士禎と盧見曾の前後「紅橋修禊」の参会者リスト中に、われわれは塩商人たちの名前を見つけることはできない。しかし、裕福な商人たちも同様に文化的パフォーマンスを借りて、自分の品格を飾ろうとした。李斗『揚州画舫録』巻八「城西録」には、当時塩商人たちの文化的パフォーマンスの派手な場面を詳細に記録している。その詩を読むかぎり、興に乗って書き上げた作品だとは考えにくく、あくまでも一種の高雅な文字ゲームにすぎず、文学価値はほとんどない。しかし、いずれにせよ裕福な塩商人たちが気に入ったのは文学そのものではなく、客人たちがもたらす文化のコード的意味であり、同時に文人たちの雅集では期待できない贅沢さの誇示でもあった。もちろん、彼らは子孫が正真正銘の正統文化の名声を博することを望み、一流の教師を招聘して子孫に科挙の道を歩ませた。その結果清代には139名の進士が出た。

王士禎の死後、「神韻」説が漸く衰え、代わって文壇を席卷したのは沈徳潜の「格調派」である。沈徳潜 (1673～1769)、字は確士、号は愚翁、江蘇長洲の人。乾隆四年 (1739年)、67歳、進士に及第した。乾隆帝の知遇を受けたので、十年ならずして内閣学士兼礼部侍郎まで拔擢された。沈徳潜の詩論は詩教の「溫柔敦厚」の伝統を継承し、詩の「載道」(文学が道德的教化のための手段である)機能を強調し、盛唐に学ぶことを提唱し、正統的詩風を唱えたので、乾隆帝の詩学思想の代弁者としての正統的權威を得た。

乾隆十五年 (1750年)、蘇州の紫陽書院院長を務めた沈徳潜は、当時紫陽書院在学中の王鳴盛・王昶・錢大昕・曹仁虎・黄文蓮・趙文哲・吳泰来などの七人の詩を集め、『江左七子詩選』を刊行した。七子の詩風は大体沈徳潜の詩論に一致したと言える。しかし、「吳中七子」の詩風は沈徳潜とすべて合致したわけではない。趙文哲と吳泰来の詩学は後に王士禎の詩風へと変化し、錢大昕は自らの詩の由来については一言も

せず、ただ王昶だけが独り「格調派」の旗幟を高々と掲げていた。これは不思議なことではなく、中国文学史あるいは思想史の中にはよく見られる現象である。嚴迪昌氏が指摘しているように、文学史でしばしば「七子」、「五子」、「十子」という類の名がよく見える。その意図はただ氣勢を張って流派を創始し門弟を集めるためであるので、諸弟子の詩風が自分に従うか否かを望まなかった¹⁸⁾。その上、知識人は都市——在来¹⁹⁾の生活空間より大きくより自由な空間——に入るに伴い、地縁・血縁関係やそれまで習得した知識などの在来的なものを変化させていった。

「吳中七子」の構成からみると、吳泰来は蘇州府長洲県の人である以外、全員太倉直隸州の人である。その中に、錢大昕は王鳴盛の妹の夫であり、曹仁虎の父は錢大昕の先生である。彼らの血縁・地縁・学縁関係は非常に強い。地方都市から中心都市に入った早々の知識人たちの人的結合が依然として多く血縁・地縁的要素を帯びていることは否認できないけれども、彼らは終始一貫して元からある社会関係資本や文化資本¹⁹⁾に固執することはなかった。また詩学²⁰⁾の主張から見れば、錢大昕が書いた王鳴盛の父王爾達²⁰⁾の墓志銘によると、王爾達は宋代の陸游と陳師道の詩を学んだ。王鳴盛と錢大昕の早年の詩学はもし家学を受け継ぐならば宋詩に偏るはずであるが、宋詩はかえって沈徳潜が反対するものであった。従って、王・錢などは紫陽書院に入ってからのはじめて新たな詩風を受け入れたと言えるだろう。

清代にあって、書院はますます官学化されて、書院で行う文化活動は政府の監視の下に置かれた。そして書院は主として知識人に社会移動（出世）を実現するための受験勉強の場所を提供する機能を持った。学生らは定期考試に合格して「膏火費」（奨学金）を確保すればよいのである。彼らは科挙試験勉強以外、興味を感じた文学或いは學術の問題を自由に議論した。特に大書院の山長（院長）と教師たちは村学俗儒（田舎学者）ではなく著名な老師宿儒であったので、書院はまた清代考証学と文学の本拠地でもあった。蘇州のような中心都市の大書院が募集する学生は、地元出身だけではなく、全国各地から

集まってきて、時には千人を超えることもあった。知識人の交遊範囲は都市に入った当初の血縁・地縁関係から、自然にもっとゆるい学縁関係へと転換した。清人の文集の中から、このような自由な「訂交」（交遊関係を結ぶ）の例を数多く見いだすことができる。都市における血縁・地縁関係の希薄化、学縁関係の融通性は、また錢大昕が蘇州を離れてからの詩学が沈徳潜と異なってきた原因をよく説明できる。ゆるやかな学縁関係は、錢大昕が沈徳潜の「格調派」から分離してくる結果となっただけではなく、考証学の権威たる惠棟の「吳派」から派生して、また「吳派」と違った學術方面に向かったことにも現れている。この問題は後に述べる。

沈徳潜が亡くなった後、文壇の権力空白を補って一世を風靡したのは袁枚である。袁枚（1716～1797）、字は子才、簡齋または倉山居士と号し、随園先生と称する。乾隆十三年（1748）、袁枚は南京で随園を購入し、次の年（1749）に弟の袁樹と甥の陸建を連れて随園に引っ越してから、五十年近くを随園で暮らした。その間に、彼は南京の多くの知識人たちと密接な関係をもつようになった。この交遊関係者は大体以下の三つのタイプに分けられる。①南京に赴任した地方官僚。主に役所が南京に置かれていた歴代の両江総督、江寧布政使、江寧府知事、上元県知事、江寧県知事である。他には、江南郷試の試験官として南京に来た官僚である。これらの官僚たちは袁枚の最も有力な後ろ盾となった。そのお蔭で、袁枚は何回も南京から追放される噂があっても、結局平穩無事に終わったのである。②鍾山書院の学者。鍾山書院の歴代の山長・教師たちの多くは考証学者である。この交遊関係から、袁枚と考証学者との日常的交遊のあり様を窺い知ることができると思う。③日常交遊士子（下層知識人）。その中の大部分は三年に一度南京に来て江南郷試に参加する士人である²¹⁾。総じて言うと、袁枚の南京での交遊圏は政治的な要素がわりに濃厚である。唱和する相手の多くは南京に在職する官吏たちであり、弟子の中の多くはその官吏たちの子弟である。袁枚はかつて乾隆五十五年（1790年）の南京詩壇の繁盛を賞賛して、「金陵の風雅、斯に於いて盛と為す」と言った。その唱和成員リストには両

江総督の孫士毅、江寧知府の李廷敬、上元県知事の張五典、上元県典史の王光晟、茶引所大使の陶瑩、上元県の儒学教諭毛琛などがおり、「隨園に唱和し、殆ど虚日無し」²²⁾、その中に平民身分の人は一人もいなかった。

同時に、われわれは南京とはまた異なった袁枚の蘇州と揚州の人的ネットワークを無視すべきではない。蘇州の婁関蔣氏は有名な大宗族であり、袁枚は蔣氏宗族の蔣元葵と進士同年の関係であり、後に袁枚の長女成姑は蔣氏の一員に嫁いだ。また、上塘聞徳橋西の平江袁氏と同族関係である。蔣氏の「繡谷園」と袁氏の「漁隱小圃」は袁枚が蘇州に来る時に必ず訪ねるところである。揚州には、主として徽商の汪氏との姻親関係がある。袁枚の四番目の従妹袁棠は揚州の大塩商汪孟翊（楷亭）に嫁ぎ、四番目の娘琴姑は汪氏の支派である汪芷林の息子汪履青に嫁ぎ、袁枚の息子袁通は汪氏の杭州支派と代々姻戚関係を結んだ²³⁾。

先に述べたように、南京は政治的機能が比較的際立った中心都市である。明末清初、南京は遺民たちが亡国の思いを寄せた都市である。清代中期に入ってから、両江総督と江寧將軍の衙門の所在地として、依然として江南の政治的中心都市であった。江南の都市の経済的地位からみれば、蘇州が第一、揚州が第二、南京が第三である。経済的中心地が東の蘇州と西の揚州に移ったことに伴い、都市の文化的地位も蘇州と揚州に譲ることになった。知識人の社会的結合、都市空間での文化的パフォーマンスの有り様もおのずから揚州と蘇州とは違って来るであろう。南京の知識人たちが意識的に政治性を色濃く帯びた雅集に参加したのは薄れ行く正統性の補償であった考えてもよいだろう。

2) 「学術場」における蘇州・揚州・南京

「呉派」（蘇州考証学派）の勃興は恵氏家族の学術伝統と密接に関わっている。恵氏の四代目の恵棟（1697～1758）、字は定字或いは松崖、小紅豆先生と称し、元和の人。乾隆九年（1744年）、郷試に落ちてから、科挙の道を断念した。乾隆二十年から二十二年までの間、揚州兩淮塩運使盧見曾の幕府に寄留してテキストの校勘に従事した。後に病を以て仕事を辞して蘇州に戻

り、翌年亡くなった。恵棟と密接に関連している「呉派」の学術は、恵氏四代が蓄積した文化資本から生まれてきたが、しかしその発展は主として外部の社会的ネットワークによって強化されたのである。王昶はかつて恵棟学術の伝播のプロセスを、紫陽書院の学生諸君が手助けしたことや盧見曾・畢沅・紀昀などの文化界の有力者が彼の著述を刊行したことによって彼の学説が世間に知られたと述べている²⁴⁾。

錢大昕は蘇州の紫陽書院在学中、王鳴盛・褚寅亮・王昶と「古学を以て互いに策励し」、さらに恵棟及び呉派学者沈彤などと忘年の友となつて、互いに経書の義を議論した。ゆえに錢大昕は清代考証学史では「呉派」学者リストに入れられる。錢大昕の学問を考察してみれば、彼は当時のさまざまな学派の学者と広く交際し、互いに書簡を往復して質疑討論し、兼ねて各家の長所を取り視野を広めた。彼の学問研究の態度は恵棟の「凡そ古は必ず真、凡そ漢は皆な好し」及び王鳴盛の「経を治むるにて断じて敢えて経を駁せじ」と主張する呉派学者のような絶対的・墨守的な態度と異なっていた²⁵⁾。錢大昕と沈徳潜との関係を述べた時にふれたように、都市の希薄化された血縁・地縁関係とゆるやかな学縁関係は、錢大昕が沈徳潜の「格調派」から分離してゆく結果となっただけではなく、学術の面にも同様の影響を与えた。錢大昕は妻族王鳴盛の推薦を受けて紫陽書院に入って沈徳潜と恵棟の教えを受けたが、しかし後の詩学も学問もみな同学師友とは違った。錢大昕らを通じて、都市型知識人のそれぞれが「血縁」「地縁」「学縁」「業縁」など基本的な社会的ネットワークによって構成する社会構造の中での異なる行動様態を窺い知ることができる。

地理的・社会的移動の最初期には、出身「県」を範囲とする同郷結合への帰属が最も重要なものであったが、経済的・学問的成功、社会的地位の上昇と同時に、その自己同一性及び「共同性」にも変化が生まれ、彼らをめぐる社会関係はその範囲を拡大して同年・同僚結合へと紡ぎ直されていった。前者が定住を実現するための受け皿として要請されたのに対して、後者は自らの成功を維持、発展せしめる保証に他ならない。錢大昕は初めて蘇州に入った時、王鳴盛・

曹仁虎・王昶などの太倉籍の士子（下層知識人）と強固な地縁グループを結成し²⁶⁾、沈徳潜と恵棟によってコード化された「威信」を獲得した。しかし学問の成功と社会的地位の上昇につれて、自己同一性と「共同性」に変化が起こり、詩学や学問などの面で同学師友と違った結果をもたらした。

揚州学派の形成は恵棟の「呉派」と戴震の「皖派」にやや遅れた。揚州学派は学問の根源が呉・皖二派の影響を受けて、呉・皖二派から変化してきた一つの学術流派である。清代中期の揚州という都市の繁栄と豊かさはこの学派の形成と発展に利便を提供し、また呉・皖二派と異なる特徴を作った。先に述べたように、揚州は塩業によって巨大な富を蓄積した。塩商人や官吏たちはまた風雅を唱え、典籍図書を收藏し、書院の設立と投資を重視し、著名な学者を招聘して教育させ、学生には高額の奨学金を与えたので、各地の知識人は喜んで揚州に雲集した。恵棟と戴震という一代の宗師はかつて盧見曾の幕府で書籍を校勘したことがある。錢大昕・王鳴盛・姚鼐・趙翼・杭世駿など有名な学者たちはいずれも揚州の梅花書院と安定書院で教鞭を執ったことがある。遅れて出現した揚州学派の学者の多くは二つの書院で勉強し、一つの学術ネットワークを形成した。活気溢れる都市で活躍した揚州学派は、一体どのような学問の特徴を形成したのか。張舜徽氏は呉・皖・揚三派の風格を比較した後、「呉派の学問は最も専門であり、皖派の学問は最も精密であるが、揚州の学問は最も融通性がある」と述べている²⁷⁾。揚州学派のいわゆる「通」は、主として「呉派」たとえば恵棟の「凡そ古は必ず真、凡そ漢は皆な好し」という墨守的態度に反対する姿勢に現れている。さらに汪中の墨子研究や阮元の曾子研究などの諸子研究という新たな研究領域を拓いた。揚州は塩業から得た巨大な利潤によってかつてないほど繁盛したが、塩業は徽州の商人たちに独占されたので、揚州と徽州との関係はきわめて密接である。学術についていうと、揚州の学術界が皖派から受けた影響は蘇州・南京・常州などの江南都市より遙かに大きかった。王念孫と任大椿はかつて戴震の門下に親炙し、焦循と凌廷堪はみな戴震の私淑弟子を自任し、「揚州

学派」リーダーの阮元が北京で戴震の諸弟子を訪問したことは、象徴的な意義を持っている²⁸⁾。揚州の学者たちは自覚的に江南文化を支配している蘇州文化と一線を引いた。たとえば、焦循はそれまで軽視された演劇の中の「花部」（秦腔・弋陽腔・梆子腔・羅羅腔・二簧調などの田舎ことばを使って歌う地方劇）を提唱し、意識的に正統的演劇を代表する蘇州の「雅部」（文化上での支配的言語としての呉方言を使って歌う崑曲）と対抗しようとした²⁹⁾。

ブルデューは、社会学の視点から知識人を研究するのは、知識人に関わる社会文化領域を研究することであると考え、彼はこれらの領域を「場」（champ）と呼んだ。「場」は人々が価値ある資源を競い合う闘争の場所である。しかし、人々は「場」内のどんな資源が最も価値があるかという問題で意見の不一致があるので、何が価値あるものとして正統化され「卓越化」（ディスタンクシオン）されるかは、その時々の方関係で決まる。「正統的な文化の定義をめぐる闘争」を通して、自らの支配の正統性を被支配層に押しつける³⁰⁾。揚州出身の汪中・阮元などが揚州学術の特徴に対する自覚と強調も、焦循の方言を使って歌う地方戯の再発見も、いずれも揚州地域の学者が新進の「共同体」の一員として行った「意識的な卓越化の戦略」であると考えられる。

蘇州と揚州は考証学の巨大な成果を収めたが、それに対して南京の成果はやや低く、有名な学者はただ嚴長明一人しかいない。彼はかつて揚州の盧見曾幕府に寄留し近くの馬氏の小玲瓏山館蔵書を観覧したので、彼の学問は揚州学派に傾いた³¹⁾。南京には著名な書院がないわけではなく、南京の鍾山書院の規模は梅花書院と安定書院に劣らない。また教鞭を執る老師宿儒がいないわけではなく、有名な学者、たとえば盧文弨・錢大昕・姚鼐などみなその山長を務めたことがあった。にもかかわらず、鍾山書院から出た卒業生の中でただ常州の孫星衍だけが著名な学者となった。ゆえにもし江南の書院が考証学の学術交流センターであり、多くの著名な考証学者がそこで勤務したのだから、きっと多くの学術後継者を養成したと考えるならば、これはあまりにも安易な考え方である。少なくとも

も南京の状況はそれほど楽観的ではなかった。盧文弨は乾隆四十一年（1776年）、孫漢に宛てた手紙の中で、南京の学風が「俗学」（科举に応ずるための学問）に染まって、優秀な者もただ詩文を書けるだけだと不満をもらしている³²⁾。盧文弨に従う生徒はわずか一、二人で、孫星衍はその中の一人であった。南京は江南郷試の所在地であり、三年に一度の郷試には一万余りの江蘇・安徽の士子が南京に蝟集した。絶えず科举の言説が氾濫しているこの都市では、それ以外の言説は考えられなかったのかもしれない。また、南京には蘇州と揚州のようにたくさんの蔵書楼がなかった。比較的名なものは清初の黄居中の黄氏千頃齋と康熙年間の曹寅の楹亭蔵書と乾隆年間の袁枚の小倉山房しかなかった。しかし、盧文弨が鍾山書院に務めた時によく袁枚のところへ本を借りに行ったが、若い世代の中には袁枚の蔵書を利用して学問を成し遂げた人はほとんどいない。その上、袁枚の蔵書は豊富（四十万卷）であったが、この才子はペダンティックな学問（考証学）を嫌っていたので、自分には役に立たない書籍は散佚するに任せた³³⁾。

ある都市を中心にする地域都市群の異なる社会構造はその文化的特徴の微妙な区別をもたらす。これらの都市或いは地域出身の学者は血縁或いは地縁関係、哲学或いは文学同士の関係、共同の師承関係などの媒介の助けを借りて結合し、それぞれ異なる流派の知識人集団を形成した。要するに、清代考証学者集団は都市のエリートたちが結成した学術集団である。清代考証学の繁栄と衰退は江南都市の繁栄と衰退と深く関わっている。太平天国の乱が江南都市の繁栄の終焉を告げるとともに、江南諸都市に寄生してきた清代考証学もなすべもなく衰退していかざるを得なかった。

V 都市のインフラと知識人の新たな凝集

1) 生計都市と悦楽都市

清代中期の知識人職業化の主要な原因は、18世紀における総人口の急激な増加と官僚人口の不変との矛盾を生じた結果、多くの知識人が順

調に官界に入ることができなくなったことにある。先に述べたように、宗族は直系家族や共同生活地区に定住する宗族成員だけに恩恵があったが、それ以外の傍系家族出身或いは宗族救済範囲を離れた知識人は絶えず出費のかさむ科举試験を準備しながら、生計問題を考えなければならなかった。多くの学者は地方長官の幕友や財産家の家庭教師や書院の教師など生計を維持できる職業を探した。しかし、知識人たちは経済の面で後援者からある程度の支援を受ける反面、政治の面で強い制限を受けた。清代の満州政権が漢民族の知識人を統制しようとして起こした筆禍事件（文字獄）が頻発するという文化的社会的危機状況の中で、彼ら知識人たちはただ学術界における地位と名声だけを追求しようとした。その結果、清代学術の非政治化が生み出されたのである。

初期の書院は山林隠逸の反都市的な性格を帯びていた。早期の書院の多くは田舎に置かれて、院長は「山長」と呼ばれた。16世紀以降、書院と科举試験制度との関係はますます緊密化し、書院の活動は政府の監視の下に置かれた。政治と文化が一体化し、書院の都市化は促進された。19世紀まで、学術的機能と政治的地位の高い書院はほとんど都市化の程度の高い都市に置かれた³⁴⁾。書院の都市下層知識人に対する救済については、書院は生徒が更に高い段階の科举試験に参加することを激励し支援するため、書院の経済力によって生徒にそれぞれ異なった程度での奨学金を提供した。揚州の梅花書院を例にとると、梅花書院で修業する生徒は正課（正式学生）・附課（定員外学生）・随課（聴講生）の三種に分けられ、乾隆年間、正課の「膏火費」（奨学金）は銀36両、附課は12両、随課はなし、となっている³⁵⁾。では書院生徒の奨学金は一体どのような水準にあったのか、次に簡単に述べてみよう。

18世紀末に一人の雇農の年収は銅貨6千から8千文であるが、1798年江南の荊溪県の1石の米の値段は900文である。清代中晩期の包世臣氏の統計によって、江南の一戸の農家で1人年間平均3石の米を食べなければならない。1石の米を900文として計算すれば、2700文が必要である³⁶⁾。当時の銅貨と銀貨との為替レートは

ほぼ1200文銅貨＝1両銀貨である。

つぎに教師と幕友の収入を検討したい。清代中期、七品県知事の年俸は銀45両と米22.5石であり、養廉銀を加えても平均645両にすぎない。書院院長の平均年収は350両であり、縉紳資格を持っている私塾教師の平均年収は100両である。江南の中心都市の大書院で、銭大昕のような大学者の年収は1200両にも上る。府知事と州県知事の幕友の平均年収は250両であり、省級長官の幕友の年収は1500両である。全体から見れば、当時の幕友の平均年収は約560両である³⁷⁾。それ以外、また墓誌銘を売って自給自足する知識人もおり³⁸⁾、袁枚の一篇の墓誌銘は1000両で売れることもあった³⁹⁾。これらの数字から見ると、清代中期の非官辺筋の収入が知識人にとっても魅力的であり、教師或いは幕友を務めると、官途につきまとう煩わしい行政事務から逸れることができ、その上また高額収入がある。劉伯驥氏は清代広東各書院山長に関する統計によって、学歴の面で挙人の人数が一位、進士が二位を占め、官職の面で儒学教授が一位、県知事と主事がそれぞれ二位、三位を占めることに注目している⁴⁰⁾。他の地域の状況も大体同じだと思う。章学誠がなぜせっかく進士に合格したのにも関わらず書院と幕府の職を選んだか想像できるであろう。もちろん、多くの人々は何度も科挙試験の失敗を味わった後、やむを得ず科挙試験の道を放棄して、教師と幕友の職業を選んだ。

幕府と書院は幕友と教師を選ぶ時に学識・経歴・経世の才を重んじ、道徳的評価は二の次であった。幕友と教師も自由に長官と書院を選ぶ権利がある。それ故に知識人は幕友になったり教鞭を執ったりして、自分の知識と引き換えに給料をもらうという「職業化」の特徴を示す一方で、あるいは独立した社会的地位と空間移動の自由を保持し、あるいは幕友と教師という職業を通じて同時代の文化界の名流と知り合い、さまざまな学術思想と触れあい、学術情報を交換し、人的ネットワークを構成した。これによって、一部の知識人は「正途」（科挙試験の道）から経済的政治的優位を得る誘惑から解放され、高位高官のブレイクあるいは学問の世界に生計の道を求めた。こうして学術の職業化が行われ

るようになった。尚小明氏の統計によれば、知識人が幕友となる社会現象は知識人の社会生活の中に一つの非常に重要な位置を占め、幕友経験がある知識人の比率は35.7～52%となった⁴¹⁾。

もし幕府と書院は中国知識人が知識の生産・流通を担う文化市場であると言えるならば、都市の悦楽空間も中国知識人のもう一つの文化市場である。都市の悦楽空間は主に園林と妓楼がある。中国の園林は反都市主義（アンチ・アーバニズム）のユートピア的性格を持っているが、むしろ都市に置かれる園林の数が多い。それは、主として都市はマンフォードのいうように、「人間が生み出した最大の便益を、最小の空間に納めるよう文明の産物を凝縮し、貯蔵して伝達しようとしたものである」⁴²⁾という人を魅了する特徴があるからであろう。都市園林は都市型知識人が都市の利便性を十分味わうと同時に、隠逸と文人趣味を満足するために入念に造営した自然空間である。蘇州・揚州・南京の都市経済力と政治力はそれぞれ異なるので、園林の数量・規模・所有主もそれぞれ異なっている。三つの都市の中で、南京の園林の数が最も少ない。袁枚所有の随園を除くと、西園と瞻園があるが、みな官署園林である。西園は両江総督署に置かれて、尹繼善が乾隆帝の南巡のために建造した。瞻園は江寧布政使司の官公庁内に置かれる。この点から南京の文化空間が帯びている政治的色彩を見ることができる。蘇州園林は中国古典園林の正宗と呼ばれて、伝統的文人的性格が比較的濃厚である。袁枚がよく泊まる「續谷園」と「漁隱小圃」の主人蔣氏・袁氏は名家大族であり、それ以外、「掃葉山莊」の主人薛雪は有名な平民詩人と医者で、沈徳潜の同門である。先にも述べたように、園林正宗としての蘇州園林の高名は市肆（市場）の名声の陰に隠れて、かえってスノビズムの強い都市の揚州は「園亭を以て勝る」と称される。揚州城内の園林は数十箇所があり、塩商人の集まる新城に多いので、園林の主人の身分は推して知るべしである。城外の26箇所の名勝に置かれた園林さえ、その造営経費はすべて塩業から出た。揚州園林は新奇性と包容性を追求した塩商人の特徴——むやみに蘇州園林を模倣するばかりではなく、中国の南北園林の融合であること——を反映してい

る。三浦國雄氏は中国園林の七つの機能を①「楽園（仙境）志向」②「隠逸志向」③「文人趣味の充足」④「ステータスの誇示」⑤「交流・接待の場」⑥「リラクゼーション・養生の場」⑦「性愛の場」とまとめている⁴³⁾。とりわけ「交流・接待の場」としての園林は文人雅集・文人結社の最も理想的な空間となった。経済的視座から見れば、園林にはまた経済的な働きもある。揚州園林は主に塩商人が造営したので、文化的活動以外、交流と接待を通じてビジネス情報を交換する機能も働いている。たとえ文人雅集・文人結社であっても、ネットワーク紐帯の中の経済的要素も無視できないであろう⁴⁴⁾。

江南都市の贅沢三昧の悦楽については、幸いに余懷の『板橋雜記』と西溪山人の『蘇州画舫録』と李斗の『揚州画舫録』という清代筆記が残っている。『板橋雜記』と『蘇州画舫録』はそれぞれ明末清初の南京と清代中期の蘇州に生きた妓女の一生を記録した香艷花史の類である。それに対して、『揚州画舫録』は主に清代中期の揚州の都市計画・歴史・商業・園林・古跡の類を記録し、一部に妓女のことにもふれている。

南京秦淮の色町の歴史は六朝以前まで遡れるが、公娼地帯として繁盛したのはやはり明代以降のことだった。先にもふれたように、秦淮河にほど近いところに、江南貢院（江蘇・安徽両省の科挙の試験場）がある。江南貢院は当時の科挙の第二段階にあたる郷試の受験場である。これに応ずる受験生数はたいへん多かった。江南貢院の試験用部屋（号舎）は二万六百四十四室あったといわれる。歓楽街の客層はやはりこれらの受験生たちだった。『板橋雜記』にはよく彼らが金を惜しげもなく浪費する生態を描いている。

明末の戦乱と清の康熙年間の禁令が、秦淮を一層荒廃せしめた。その復興は乾隆年間の末ごろからであるという。袁枚の享楽的生涯を見ると、毎年度々蘇州と揚州に「尋春」（買春）をしに出かけているが、南京での遊びが意外に少ない。ここから秦淮の衰退、或いは秦淮の俗悪化ということが伺われる。秦淮に見切りをつけた妓女が、蘇州に移ったことも考えられる。同じく戦乱と禁令の災厄を受けたが、蘇州という都市の性格を考えあわせると、歓楽街がたとえ一

時的に衰微したとしても、南京ほどのことはなかったであろうし、復興も比較的早かったであろうと考えられる。南京が政治と文化の都市であったのとちがって、蘇州では歓楽街に遊ぶ人もやや色彩を異にしたのである。文人墨客のほかにも富裕な商人もかなりいたであろう。『蘇州画舫録』によれば、蘇州の歓楽街は西北郊外の虎丘にある。そのあたりは蘇州の最も繁盛な商業中心地でもある⁴⁵⁾。

王振忠は揚州の妓楼文化の伝統が主に蘇州から来て、南京秦淮との伝承関係もないがしろにできないと指摘した⁴⁶⁾。揚州妓楼文化の繁栄は、「養瘦馬」という風習になって現れている。「養瘦馬」という風習については、明末の張岱『陶庵夢憶』に詳細に記録されている。すなわち未成年の女の子を養って技芸を教え、大人になったら妾として売る。実はこの風習はもともと蘇州周辺の風習であり、宋代から存在している。しかし、揚州の「養瘦馬」は当地の特色がある。すなわち養っている女の子に自ら卑しい地位に安んじて本妻に迎合することを教え、妾をもらって家庭紛争を起こすことを避けるという新機軸を出している。技芸については、普通の妓楼が教える琴棋書画などの技芸以外、なんと記帳やそろばんなどの経理知識を教え、将来はパトロン商人のために会計を担当させようとする⁴⁷⁾。後に、「養瘦馬」の風習は蘇州・南京に逆流して全国のモデルになり、「妾をもらおうとしたら、揚州で求めよう」（要娶小，揚州討）という諺ができた。

2) 地域中心都市における知識人社会の構造

G. W. スキナーは「中心地」という概念を「人口に対してだけではなく、最小限、近くの一団の村を含む後背地にも重要な中心機能（経済機能と同様に政治行政機能、文化機能、社会機能）をはたす集落である」と定義した⁴⁸⁾。スキナーの「中心地」概念はすべての行政的都市と、すべての定期市を維持していた非行政的町を包括しているが、彼は人口階級、行政的地位と経済的階層構造の上に占める地位によって分類を行った。行政的地位別の中心地は、帝都、省城、道城、府城・直隸（中央直属）州城、県城・散（県に準ずる地位の意）州城・庁城、非行政的

な中心地としての大小の市鎮, の6段階となる。経済的階層構造上の地位別の中心地は, 中心首府, 地域首府, 地域都市, 大都市, 地方都市, 中心市場町, 中間市場町, 標準市場町の8段階となる⁴⁹⁾。本稿のいわゆる地域中心都市は, 主として, 経済的階層構造の上で地域都市級あるいはより上位の都市でもあり, 行政的階層構造の上で府城級あるいはより上位の治所でもあった都市を指し, 地域の最高階層の行政的・経済的都市である。スキナーが指摘したように, 「中心地階層にのぼって好機を利用する人が歩む道は二つに過ぎない。彼らは経済的中心地でビジネス機会を利用するのではなく, 行政的中心地で勉強して官吏となる機会を利用するのである」。同時に, 「故郷を離れて都市に来て運を試してみるの, 常に家庭, 宗族と郷里の代表として来たのである」⁵⁰⁾。それ故に, 大都市は家庭・宗族・郷村が最大限に外へと拡張する空

間である。中心都市の社会構造の中で, 政治的要素, 経済的要素及びそれぞれ二つの機会を利用しようとして中心都市にやってきた人々が持ってきた血縁・地縁的要素は非常に典型的である。この三つの要素から地域中心都市の知識人社会の構造を以下のように図示してみた。この図にしたがって説明してみよう。(図4参照)

この社会構造の内部には, 主に八つの文化装置⁵¹⁾があり, それぞれが政治体系, 経済体系, 親族体系という三つの社会組織に含まれて, 共に一つの文化的社会構造を成している。ここで「宗族」ではなく「親族」を用いる理由は, 先に強調したように, 上位都市へ向かえば向かうほど, 宗族組織はどんどん希薄化するが, しかし宗族の核としての親族(姻戚を含む)は紐帯が強いので, 希薄化の影響が当然に少ない。八つの文化的装置のうちに, 完全に親族体系に属する装置は家廟であり, 数が少ない。井上徹氏

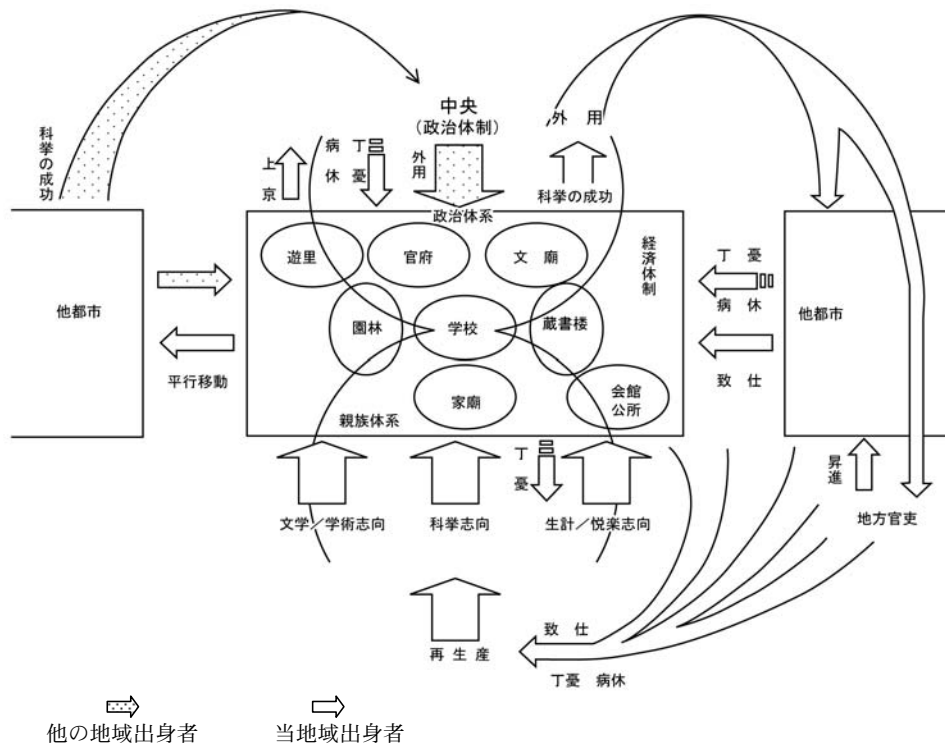


図4 地域中心都市における知識人社会の構造（イメージ図）
（出典：筆者）

の研究によって、清代中期蘇州城内に置かれて族田・家塾・家廟・族譜などの宗法を実現する装置を持っている宗族はただ四つしかない⁵²⁾。完全に政治体系に属する装置は官府と文廟（他の政治的祝祭空間をも含む）である。府州県学、書院、義学などを含む教育機関は官営が最も多く、一部は宗族と商人が経営している。園林の多くは個人園林であるが、官署園林もある。官営蔵書楼の規模は最も大きく、文化的名門と商人の書楼の数は一番多い。会館と公所は主に商人が設立し、その重要な機能は同郷ネットワークを中心に経済活動を行い、科挙試験期間の同郷受験生にも宿泊を提供するのである。家廟、特に都市郊外あるいは地方階層の都市にある宗族が拠点として中心都市に設置する家廟（聯宗の場合には多い）も会館の役割を果たす。各都市の諸文化装置にはいくつかのレベルがあるが、いずれも知識人の都市文化創造の重要な舞台であり、「場」である。

地域中心都市階層より下位の都市の知識人は中心都市での行動によって大体「科挙志向」、「文学／学術志向」と「生計／悦楽志向」という三つのタイプに分けられる。この三つのタイプは、単に叙述上の便宜を求めるために作った観念的な類型であり、現実の場合はもっと複雑なはずであり、一人の知識人の身に三つの志向が併存している可能性もある。

三つのタイプの知識人はそれぞれの「移動策略」(mobility strategy, スキナーの用語)によって、まずいろいろ機会が集まっている地域中心都市へ地理的移動を始める。下位都市出身の知識人はしばしば地方長官或いは同郷(同族)に推薦され優秀な人材として上位都市の書院に入って勉強したり、或いは官府に入って幕友になったりして、生活の危機を解決しようとする。科挙試験の合格率は極めて低い。多くの人々は何回もの失敗を味わって、やむを得ずその道を諦めて教師と幕友に生計の道を求める。ごく少数の人だけが順調に「会試」、「殿試」(最高段階の試験)を突破して、中央政府に務め(京官)、或いは地方に派遣されて(外用)県知事や州・府長官に務める。原則として官僚は本籍地に務めることができないので、致仕するまでに長い間本籍地を離れなければならない。その間に丁

憂(父母の喪)或いは自身の健康状況などの原因で休職をする。たとえば丁憂の法定期間は二十七ヶ月である。しかし、丁憂・休職期間或いは致仕後に必ず郷里(郷里が田舎或いは下位都市の場合)に住むことが規定されていないので、彼らは本籍地域の中心都市を定住地として選ぶこともありうる。

もちろん、中心都市に集まって機会を求めようとする知識人がみな成功するわけではない。失敗した人は他の都市に行って新たな機会を求め(平行移動)、或いは郷里に戻って、望みを子供の身に託して文化再生産を行うかもしれない。再生産という一つのサイクルについては、致仕して郷里に戻った官僚にとっても同様である。再生産を通じて、知識人社会の循環構造が形成される。

この循環の社会構造においては、八つの文化装置は知識人が文化的パフォーマンスを演じる舞台であり、知識人が結び合う場である。いうまでもなく、さまざまな利害の錯綜する都市社会の知識人は、さまざまな人脈を積極的に利用した。政治的・経済的利益を共有する官僚にとっても、書院・幕友の職への推挙や文化的名声を得るために有力者の後援を必要とする中層・下層知識人にとっても、「同族・同郷・同門・同年・同官」などの「同」を紐帯とするネットワークは社会生活上不可欠であった。知識人は立身出世のために、「同」を紐帯とする多種多様な人間関係を主体的に選択し、またその諸関係に取り込まれていった⁵³⁾。特に親族関係が希薄化する中心都市には、下位都市と他の地域の都市からやってきて血縁や姻戚、地縁関係などによって結びつくことが困難な知識人に対して、「同門」・「同僚」・「同年」などの柔軟且つ広範な人脈が地縁・血縁性の弱さを補強して、自己の社会的基盤を強化した。ただ「同」の諸関係の内部は均一的対等的な関係ではなく、多くの場合、利権の獲得のために有力者との人脈が必要であったので、諸関係はそれぞれの有力者をパトロンとするパトロネージの連鎖を形成していくことになった。また、こうした人間関係は広く柔軟であるがゆえに、その全成員の結合が密であるわけではない⁵⁴⁾。たとえば、七千人の詩の唱和者を得た両淮塩運使盧見曾は、汚職事件で

新疆のイリに流された。流罪に処された時、ただ一人の幕友だけが彼に従ってイリに行った。彼が亡くなった後、彼の息子たちは浮浪児となった。また、先に述べた錢大昕がみづから書いた年譜には沈徳潜との詩学の師承関係に対して一言もふれていない。その上、自分の詩も収録されている『江左七子詩選』に対しても沈黙を守っている。

また、先に「文学場」と「学術場」を設定して諸都市のそれぞれ特徴ある文学流派と学術流派を分析し、以下のことを明らかにした。諸都市はそれぞれが政治・経済・文化に異なる重点を置くことによって、都市の生態構造・文化装置・文化的特徴などに微妙な差異が生まれ、知識人はそれぞれ都市の異なる性格に応じて、多種多様かつ複雑な「共同体」を形成した。

しかし、都市の文化装置の問題にせよ、都市型知識人の人的結合の問題にせよ、あまりに単純化して論じることは危険のように考えられる。都市文化創造の担い手としての知識人は先に構想した都市型知識人社会構造のモデルの中で、いかにしてさまざまな社会紐帯を含む人的ネットワークを広げていくか、いかにして流動的・危機的競争社会状況の中で有効的に各種の資本を利用して知識人「共同体」を再構成し新たな文化を創造するのか、等の問題を含め、いずれも精密な事例研究をする必要がある。本稿では中国近世の都市型知識人社会の形態学的研究の序説として、以上の方向性を概観した。更なる考究は今後の課題にしたいと思う。

注

1. Benjamin A. Elman: *Classicism, Politics, and Kinship: The Chang-chou School of New Text Confucianism in Late Imperial China*, Published by University of California Press, 1990, pp. 6, 15, 34.
2. エルマンによれば、清代の常州今文経学は「ある種の家族学術理念の具現であり、その伝授は特定の社会的・政治的な環境の中での宗族の紐帯に依拠していた」。清代において、常州の莊氏宗族は29名の進士と90名の挙人を出している。

そのうちに11名が翰林院に入った。劉氏宗族は劉光斗という支派だけで10名の進士と9名の挙人を出している。劉・莊二族は長い間の密接な姻戚関係を通して、宗族的資源（考証学に反対し伝統的儒学を重視する家学という文化資本をも含む）を共有して、多くの宗族成員がこれらの宗族的資源を元手にして科举に合格し、一族の地域的学術声望を国家の政治権力に転化して官僚となることにより、「宗族的文化資本」を再生産していった。Benjamin A. Elman 前掲書, pp. xxxiii, 24, 53-59, 67, 99-100.

3. 中心地、経済的中心地、行政的中心地の用語はG. W. スキナーの概念に基づく。1933年、ドイツの地理学者のヴァルター・クリスタラー（Walter Christaller）は有名な「中心地理論」（Central Place Theory）を打ち出して、都市が一定の地域内で一定の法則によって互いに結合し、都市の階層構造システムを形成することを示した。アメリカの人類学者のスキナーはこの中心地理論を19世紀末期の中国に応用して、揚子江上遊地域の都市システムを実証研究してみごとな成功を得た。スキナーは中国王朝晩期の都市と地方組織を官僚制の行政的目的と自然的・経済的目的によって、経済都市システムと行政都市システムという二つの空間的階層構造に分けた。経済的階層構造は平均人口によって8つのレヴェルの中心地から成っていた。すなわち中心首府（central metropolis = 667000人）、地域首府（regional metropolis = 80000～217000人）、地域都市（regional city = 39400～73500人）、大都市（greater city = 17200～25500人）、地方都市（local city = 5800～7800人）、中心市場町（central market town = 1800～2330人）、中間市場町（intermediate market town = 450～690人）、標準市場町（standard market town = 100～210人）、となる。清朝の公式の行政的階層構造は6つのレヴェルから成っていた。すなわち（上位都市）帝都、省城、道城、府城・直隸（中央直属）州城、（下位都市）県城・散（県に準ずる地位の意）州城・散庁城、非行政的な中心地としての大小の市鎮、という順で連なるかたちになる。G. William Skinner: *City and the Hierarchy of Local Systems*. (Edited by G. Wil-

- liam Skinner: *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977) pp. 253, 286, 301-304, 及び斯波義信『中国都市史』(東京大学出版会, 2002年), 99-101頁, 参照。
4. 何秉棣『科举と近世中国社会: 立身出世の階梯』(寺田隆信・千種真一訳, 平凡社, 1993年), 93頁, 243頁。
5. F. W. Mote: *The Transformation of Nanking, 1350-1400*. (G. W. Skinner 前掲書), P. 148.
6. 范金民『明清江南商業的發展』, 南京大学出版社, 1998年, 142頁。
7. 孫嘉淦『南游記』には「閭門内外, 居貨山積, 行人水流, 列肆招牌, 燦若雲錦, 語其繁華, 都門不逮」とある。
8. 耶德 (Hedde)『万物講解』。范金民前掲書145頁より引用。
9. 李斗『揚州画舫録』卷六「城北録」。
10. G. W. スキナーは北京の都市生態を代表例として, 中国明清時代の都市生態の特色について次のように指摘した。中国の歴史都市には二つの中枢があることである。一つは商工区であり, その典型的な特徴は都市の地理的中心を離れ, 交通便利な城門に近い。もう一つは官紳区であり, 縉紳たちの邸宅は常に彼らと密接な利害関係にある役所, 特に学宮の近くに集中した。一般的, 書院や書店など文化的施設もしばしば学宮と貢院の隣に置かれている。G. W. Skinner 前掲書, P. 533, 参照。しかし, 都市がそれぞれが政治・経済・文化に異なる重点を置いていたこと, 及び都市歴史の長さの違いによって, 都市の生態構造にもやや差異があったことは注意を要する。例えば, 揚州と広州はいずれも旧城が拡大された都市商業活動の要求を満たすことができなかったので, 旧城の外に商業活動の中枢として新城を建てて, 二核の都市生態構造を形成したのである。しかし, 南京の状況は正反対である。南京の都市商業活動は拡大ではなく縮小であり, その商工区は次第に都市の主な消費人口となった官紳が集中している官紳区へ近づいた。最も著しい証拠は, 明初の南京の妓楼(著名な十六楼)は多く西南部の三山門と南部の聚宝門の外に置かれたが, 清代にあって, 城外の妓楼は跡形もなく消え去って, 城内の江南貢院の周辺に集中した。
11. 董玉書『蕪城懷旧録』卷一。
12. Hugh D. R. Baker: *Extended Kinship in the Traditional City*. (G. William Skinner 前掲書), pp.502-504.
13. 呉滔「宗族与義倉: 清代宜興荆溪社区賑濟実態」, 『清史研究』2001年第2期。
14. 『漁洋山人自撰年譜』卷上には「山人官揚州, 比号繁劇。公事畢, 則招賓客泛舟紅橋, 平山堂」とある。
15. Tobie Meyer-Fong: *Making a Place for Meaning in Early Qing Yangzhou*. (Late Imperial China, Vol. 20, No. 1, June, 1999)。
16. 拙論「メディアとしての随園雅集図」『人文論叢』(大阪市立大学大学院文学研究科) 第31巻。
17. 李斗『揚州画舫録』卷十「虹橋録上」には「時公修禊詩和者殆遍, 惟惠棟不与, [張]駱不和韻, 並称於時, 駱名由是大起」とある。
18. 嚴迪昌『清詩史』, 浙江古籍出版社, 2002年, 456頁。
19. 社会関係資本(capital social), 文化資本(capital cultural)などの用語はブルデューの概念に基づく。社会関係資本(=人脈)とは, さまざまな集団に属することによって得られる人間関係の総体であり, そのつながりによって何らかの利益が得られる。文化資本とは, 家庭環境や学校教育を通して蓄積された知識・教養・趣味や, 書物・絵画などの有形の文化的財や, 学校制度や試験によって賦与された学歴・資格などを含む広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。
20. 錢大昕『潜研堂文集』卷四十三「虚亭先生墓志銘」には「好作詩, 以放翁, 後山為師」とある。放翁は陸遊の字であり, 後山は陳師道の字である。
21. 例えば, 『随園詩話』卷八・八九条には「常熟孝廉邵君培德, 每秋試, 必以詩見投」と記している。
22. 『随園詩話補遺』卷三・六条。
23. 嚴迪昌前掲書, 816頁。汪芷林, 袁枚の戊午年順天府鄉試同年でもある。
24. 王昶『湖海詩伝』「惠棟」。
25. 王俊義・黄愛平『清代學術文化史論』, 天津

- 出版社，1999年，203頁。
26. 錢大昕『潜研堂集』卷四十三「日講起居注官翰林院侍讀學士曹君墓志銘」には「中丞覺羅雅公樗亭，選高才入紫陽書院肄業，州縣以君名。時青浦王君昶與予亦同入院，三人者食則同爨，夜則聯牀，而長洲吳君泰來，上海趙君文哲及王君鳴盛數過從，相與鏃厲為古學。君在院尤久，院長沈文愷公數稱其詩」と，黃文蓮を除く「吳中七子」の親しい関係を伝えている。
 27. 張舜徽『清代揚州學記』に「吳學最專，微學最精，揚州之學最通」と見解を述べている。
 28. 翁玉強「＜揚州學派＞學者的生活狀況與學術之考察」（名古屋大學博士課程認定論文）。
 29. 「花部」は「雅部」（崑曲）と互いに対立していて，「亂彈」とも呼ばれ，京腔・秦腔・弋陽腔・梆子腔・羅羅腔・二簧調などの地方劇を含んでいる。焦循は非常に花部の演劇を重視し，「花部原本於元劇，其事多忠孝節義，足以動人。其詞直質，雖婦孺亦能解。其音慷慨，血氣為之動蕩」と言い，また「彼謂花部不及昆腔者，鄙夫之見也」と言った。著作は『花部農談』がある。
 30. 「場」と「象徵闘争」について，ブルデュー『ディスタンス・オン・I』第4章「場の力」（石井洋二郎訳，藤原書店，1994年），349頁，392頁，『芸術の規則I』（石井洋二郎訳，藤原書店，1995年），145-151頁，参照。
 31. 錢大昕『潜研堂集』「内閣侍讀嚴長明伝」を参照。
 32. 盧文弨『抱經堂集』卷十八「寄孫楚池師書」に「在鍾山幾五載，幸有一二同志，信而從焉。至於漸染俗學已深者，殆終不能變也。……窺其意念，似終不若時文之可悅，高者亦不過諧聲屬對，為詩賦之用而已。所謂學者如牛毛，成者如麟角，不信然乎」と鍾山書院の學風を非難した。孫漢，字は倬雲，楚池と号し，安徽省休寧の人。袁枚は兩江總督孫士毅に宛てた手紙にも「鍾山書院諸生文字不佳，枚早知之，非敢薄待此間士也。……近今諸生，竅啓寡聞，侈然自足，雖歷任山長盧抱經，錢辛楣，姚姬伝諸君子，何嘗不是名儒碩士，而無如師弟身分，相隔太遠……」と述べている。
 33. 袁枚『小倉山房文集』卷二十九「散書記」には「乾隆癸巳，天子下求書之詔，余所藏書伝鈔稍稀者，皆獻大府，或假賓朋，散去十之六七」とある。
 34. Tilemann Grimm: *Academies and Urban Systems in Kwangtung*. (G. W. Skinner 前掲書), pp. 476, 479.
 35. 蔡貴華「揚州梅花書院考」（馮爾康編『揚州研究—江都陳軾群先生百齡冥誕紀念論文集』，陳捷先出版，1996年），380頁。
 36. 江慶柏『明清蘇南望族文化研究』，南京師範大學出版社，2000年，95頁。
 37. 張仲礼『中国紳士の収入』，上海社会科学出版社，2001年，81頁。
 38. 江藩『漢學師承記』「王鳴盛」，「売文諛墓以自給」。
 39. 袁枚「隨園遺囑」。
 40. 劉伯驥『廣東書院制度』，國立編譯館中華叢書編審委員會，1979年，262頁。
 41. 尚小明『學人游幕與清代學術』，社会科学文献出版社，1999年，31-44頁。楊念群『儒學地域化的近代形態—三大知識群體互動的比較研究』，生活・讀書・新知三聯書店，1997年，269-290頁。Benjamin A. Elman: *From Philosophy to Philology*, Harvard University Press, 1984, pp.95-96.
 42. Lewis Mumford: *The City in History: Its Origins, its Transformations and its Prospects*, Harcourt Brace & World, Inc., N. Y., 1961, P.30. 生田勉貳『歴史の都市・明日の都市』，新潮社，1969年，97頁。
 43. 三浦國雄「中国近世の庭と知識人と都市・序説」，2003年5月21日，大阪市立大学文学研究科 COE-C 研究会。
 44. 『小倉山房尺牘』卷一には「答金寿門託売灯」という書簡がある。金寿門は作った提灯を袁枚に頼んで南京で販売しようとした。この書簡は袁枚の返事である。金寿門は，すなわち「揚州八怪」の一人の金農である。
 45. 岩城秀夫訳『板橋雜記・蘇州画舫録』，平凡社，1964年，12頁，213-220頁。斎藤茂『妓女と中国文人』，東方書店，2000年，165-194頁。大木康『中国遊里空間—明清秦淮妓女の世界』，青土社，2002年，106-117頁，185-197頁。
 46. 王振忠「明清兩淮鹽商與揚州青樓文化」『復旦學報』（社会科学版）1991年第3期。
 47. 王振忠前掲論文。「叫他多少識点字，學兩套

琵琶弦子，打算子，記帳目，管家事，做生意，多有客人使銀子娶去掌櫃的」。

48. G. W. スキナー『中国王朝末期の都市』（今井清一訳，晃洋書房，1989年），16-17頁。

49. 注3，既述。

50. G. W. Skinner 前掲書，pp.539-540.

51. 文化装置（cultural apparatus）という用語は，C. W. ミルズによってはじめて社会的に使われた概念である。ミルズによれば，「低開発国」（文化的側面で西欧的な意味での科学をもったことがなかった中国も）においては，「最初から，かれらの文化装置は政治的ビジョンと政治的要求に満ちている。これこそ低開発地域の知識人の主要な役割に関する最も著しいまた最も重要な事実である」。文化装置という概念においてミルズが強調したのは，「制度化された秩序，主流を形成する秩序の維持のために奉仕

する」側面であった。C. W. ミルズ『権力・政治・民衆』（青井和夫・本間康平訳，みすず書房，1971年），322-333頁，参照。

52. それぞれは蘇州城内西北隅の范氏義莊，休休庵前の申氏義莊，齊門小棧の呉氏繼志義莊，因果巷の陶氏潯陽義莊である。井上徹『中国の宗族と国家の礼制』，研文出版，2000年，302頁，参照。

53. 平田茂樹「宋代の朋党形成の契機について」（宋代史研究会研究報告第六集『宋代社会のネットワーク』，汲古書院，1998年），39頁。

54. 都市社会の人間関係についての論述は，徳橋曜の14-15世紀のイタリア都市社会における「友人関係」のあり方に関する研究から多くの啓発を得た。徳橋曜「中世フィレンツェの人間関係」（二宮宏之編『結びあうかたち ソシアビリテ論の射程』，山川出版社，1995年），参照。

Forms of Urban Intellectual Society: Mainly in Soochow, Yangchow, and Nanking in the Middle of the Qing Dynasty

Biao WANG

Firstly, this paper makes a detailed analysis of cultural performances that intellectuals, living in the highly civilized area Chiang-nan 江南, mainly in Soochow 蘇州, Yangchow 揚州 and Nanking 南京, played at the stage where people eagerly pursued capital-cultured and privileged discourse.

Next, the paper describes the behavior and consciousness of intellectuals working as teachers in academies and working as secretarial staff in local government offices, located in those three cities.

Lastly, the paper presents a model of the forms of urban intellectual society, by which we can come to understand mutual interaction between intellectuals and the city in total.

Keywords : the middle of the Qing Dynasty, Chiang-nan, central city, intellectual, structure of society